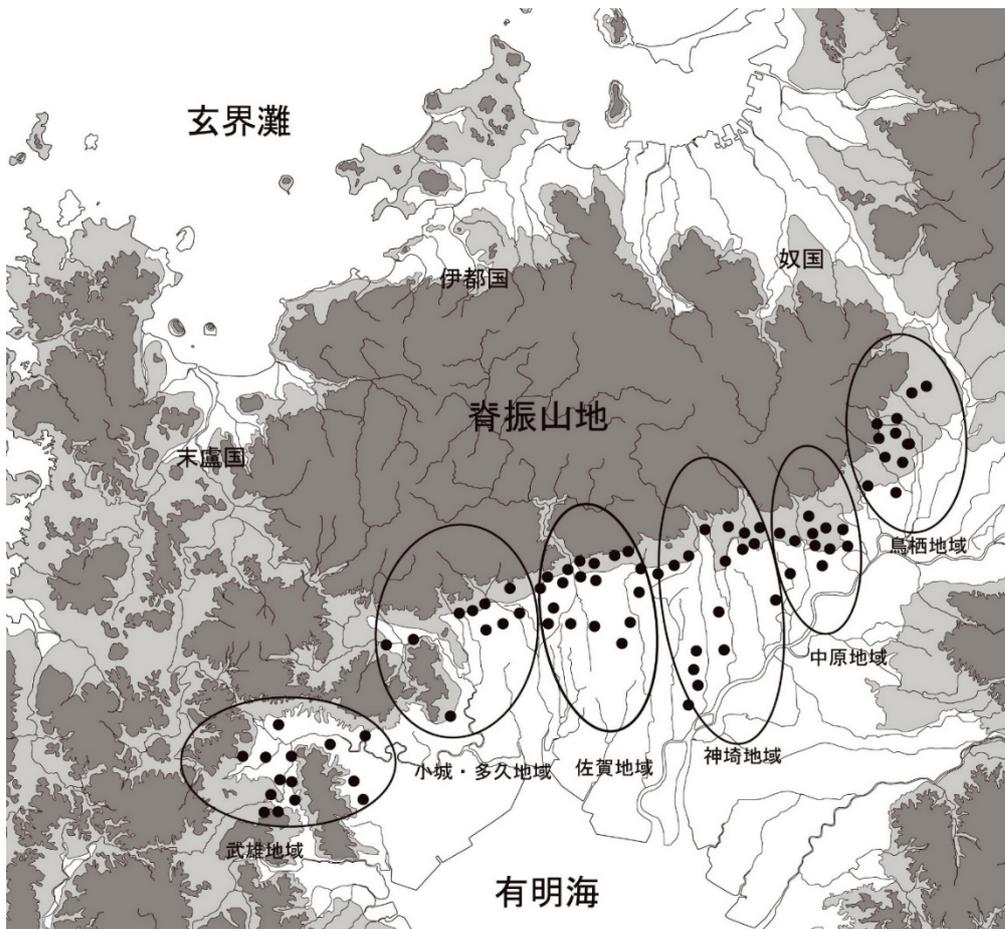


1 佐賀平野の地理的環境と地域的区分

佐賀県は、九州の北西部に位置する。現在の行政区分で言えば、北と東を福岡県と、西側を長崎県と接する。県の中央域を標高約 800~1,000m 程度の山塊及び山塊から派生する支嶺がつづら上に連なる脊振山地が位置し、佐賀県域を玄界灘沿岸地域及び有明海側に分ける。

弥生時代の遺跡の立地に関しては、佐賀平野のボーリングデータから復元された弥生時代の旧地形をもとに弥生時代終末期から古墳時代初頭の遺跡の分布を重ね合わせた結果、佐賀平野に分布する該期の集落は、有明海に流れ込む河川により山麓部と低平地部の遺跡が有機的に繋がる4つの流域圏で（中原地域（寒水川・切通川流域）、神埼地域（田手川・城原川流域）、佐賀地域（巨瀬川・嘉瀬川流域）、小城地域（祇園川流域））の4地域を抽出されている。（蒲原 2002）佐賀平野には、この4地域に鳥栖地域及び内陸部の武雄地域を加え、計6つの地域が設定できる。



2 吉野ヶ里遺跡のあゆみ

吉野ヶ里遺跡が全国的に知られるきっかけとなったのは、平成元年の「邪馬台国を彷彿する遺跡の発見」という見出しで報道されたことによるが、学界では、すでに昭和9年（1934）段階で中央の学会誌に報告されていた。ただ、この時は正式な発掘調査によるものではなく、遺跡周辺での遺物の不時発見や採集された資料から遺跡の内容を伺う程度であった。本格的な遺跡の内容が判明するには、その後50年余り待たなければならなかった。

昭和57年（1982）、吉野ヶ里遺跡が所在する吉野ヶ里丘陵が工業団地造成の候補地に選定され、同年7月から80haを対象として遺跡の確認調査が実施された。昭和61年（1986）5月から工業団地内の文化財調査に着手し、3年間で約30haの発掘調査を開始した。

3ヵ年の調査では、400mを超える弥生時代中期を主体とした甕棺墓の列埋葬や駅家と推定される奈良時代の役所跡、それに伴う古代官道などの重要な発見が相次いだ。甕棺からは、鏃を撃ち込まれた人骨や首を切り取られた人骨、南海産の貝輪を身につけた人骨なども発見された。

集落に係る発見としては、弥生時代後期の大規模環濠がある。この環濠は、丘陵の西側を回るもので、最大幅6m、深さ2.7mで確認された総延長は1.2kmにもなる。この環濠からは、多量の土器とともに当時国内唯一の出土品であった巴形銅器の鋳型も出土した。

この巨大な外環濠の内側に弥生時代後期の区画が発見された。この区は、現在「南内郭」と称され、その平面形態はやや長方形の形をしており、環濠の一部を半円形または方形に張り出している。その張り出し部分の内側には、物見櫓とみられる1間×2間の掘立柱建物が存在し、防御性の高い集落と考えられていた。

吉野ヶ里遺跡の発掘調査の最終段階である平成元年（1989）2月に、当時奈良国立文化財研究所の佐原真氏がNHKと朝日新聞の記者とともに吉野ヶ里遺跡を訪れた。その翌日、朝日新聞の一面記事とNHKの全国版のニュースで「弥生時代のクニ」邪馬台国を彷彿させる遺跡として報道され、瞬く間に全国的な話題となった。

詳細は省くが、吉野ヶ里の報道以降、2か月余りで約100万人が遺跡の見学に訪れ、周囲には屋台もたったほどである。このときの様子は「吉野ヶ里フィーバー」と呼ばれた。調査の最終段階で墳丘墓の調査に着手したところ、鮮やかな朱色をした甕棺の内部から有柄細形銅剣とガラス製管玉が発見され、遺跡の重要性がさらに増した。

この甕棺の発見を受けて佐賀県は、工業団地造成予定を白紙撤回し、遺跡の保存活用に舵を切り替える。以下は国営公園への道のりである。

- ・平成2年5月 吉野ヶ里遺跡（22ha）国史跡指定
- ・平成3年8月「国営吉野ヶ里歴史公園実現推進協議会」が発足し、官民一体となった国営歴史公園整備を目指す。
- ・平成3年5月 吉野ヶ里遺跡（22ha）特別史跡指定
- ・平成4年10月 国営吉野ヶ里歴史公園閣議決定 54haの公園整備

- ・平成5年3月 「吉野ヶ里歴史公園基本計画」策定
- ・平成7年11月 歴史公園整備着工（北内郭周辺）
- ・平成13年4月 国営吉野ヶ里歴史公園第一期 開園

3 吉野ヶ里遺跡の変遷（集落と墓地）

（1）集落を中心とした変遷

弥生時代前期の吉野ヶ里遺跡は、弥生時代の開始段階から集落が形成される。吉野ヶ里丘陵の先端に丘陵を横切るような条濠が作られる。また、吉野ヶ里丘陵に小規模な集落域が形成され始める。前期後半になると、吉野ヶ里丘陵の南部を取り囲む約2haの環濠が形成される。

弥生時代中期には、前期につくられた環濠が埋没し、その北側の一部を利用し、環濠が再掘削され、集落域を丘陵部から裾部に向け拡大する。また、丘陵南端部には、細形銅剣を副葬した弥生時代中期初頭の甕棺墓のほか、青銅器の鑄造に関連した遺構が存在する。

中期後半に入ると、甕棺墓群は丘陵上に引き続き作られるものの、集落域がその範囲を狭めていく。

弥生時代後期前半には、集落の中心が遺跡の南部から南内郭がある中央部に移動する。吉野ヶ里丘陵の西側斜面を最大幅6mにもなる大規模な環濠（外環濠）が掘削されるようになるが、集落全域をめぐるような状況にはなっていない。この外環濠からは、巴形銅器の鑄型も発見されていることから青銅器生産が、この時期まで続いていたことがわかる。

なお、弥生時代中期に最盛期を迎えた甕棺墓中心とする墓地群は、後期に入るとその数を減らし、墓域そのものも縮小する。

弥生時代後期後半には、丘陵の西側を巡る外環濠が北へ延長され、北墳丘墓を取り巻くように作られる。遺跡中央部では、外環濠の内部を溝で区画する南内郭が成立する。この南内郭の西側の平坦地に高床倉庫群が建てられるようになる。この時期以降、丘陵部では明確な墓地が認められない。

弥生時代終末期に入ると、遺跡中央部の南内郭では、濠が再掘削され、範囲が拡張される。この南内郭の濠の一部は半円形または方形に張り出され、その内側に物見櫓とみられる掘立柱建物が複数建てられる。南内郭の北東には、北内郭は、二重の環濠により構成される北内郭が作られる。その平面形は、ちょうどアルファベットの「A」字形をしている。北内郭をAの向きで説明すると両側辺の中央を半円形に張り出し、下部にあたる基部の両側を方形に張り出す。

この北内郭に伴う建物には、掘立柱建物跡7棟、竪穴建物跡3棟が存在したとみられる。掘立柱建物跡のうち、祭殿とみられる3×3間の総柱建物跡は、柱の太さが50cmにもなる柱を用いて建てられている。建物の一辺がそれぞれ12.3m、12.7mと弥生時代の掘立柱建物跡としても極めて大型のものである。

(2) 墳墓の様子

吉野ヶ里遺跡からは、3,000基を超える甕棺が出土し、そのうえ首長墓である墳丘墓の存在から、弥生時代全期間を通じて墳墓が継続してつくられるイメージを持たれている。しかしながら、弥生時代後期に限れば、その数は非常に限られる。その原因として中期後半以降埋葬施設が甕棺墓から土壙墓などに移行することがあげられる。甕棺墓そのものは、弥生時代後期前半まで残るが、後期に入るとその数は極めて少なくなる。また、土壙墓についても共伴する土器が伴わないケースがあり、明確な所属時期を決定することができない。

吉野ヶ里遺跡の弥生時代墳墓は、前期末に出現するが、当初は極めて小規模である。次の中期初頭に入り、遺跡の南部および北部に甕棺墓域が形成され、間もなく甕棺の列埋葬が始まる。この列埋葬も遺跡内に一ヶ所だけではなく、4ヶ所認められる。また、列埋葬だけでなく集塊状につくられる墓群もあり、中期前半（汲田式期・須玖式期）には、丘陵上に甕棺墓が広範囲に広がる。

中期前半に遺跡北部の丘陵先端に墳丘墓が作られる、この墳丘墓からは、中期前半から後半にかけての甕棺墓14基が確認され、うち8基から細形銅剣をはじめとする武器型青銅器が副葬されていた。最も新しい甕棺であるSJ1002甕棺墓からは、柄と剣身が一体となった柄飾付有柄細形銅剣1口とガラス製管玉79点が出土している。この甕棺を最後に墳丘墓での埋葬が終了する。

墳丘墓から谷を挟んで、西側丘陵斜面に作られた中期後半（立岩式期）SJ2775甕棺墓からは、前漢時代の異体字銘帯鏡1面と両腕に貝輪計36個を装着した女性の被葬者が発見されており、この甕棺の被葬者が墳丘墓以後の有力者とみられる。

なお、弥生時代後期に入ると、墳墓そのものの数が減少する。北内郭に隣接した地点で後期初頭の甕棺墓に鉄製刀子を副葬したものや吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ区で外環濠と切合う墳墓群の中に後期の甕棺墓がわずかに存在するが、それらの墳墓は期前半まで営まれ、後期後半あるいは終末期までにはくならない。北内郭及び南内郭が営まれた時期の有力者の墳墓は判明していない。

古墳時代初頭に入り、弥生時代後期に形成された外環濠や北内郭・南内郭などの環濠や溝跡が埋没し、その機能がすべて失われる。その直後、吉野ヶ里丘陵南部を中心に前方後方墳4基が相次いで築造される。これらの前方後方墳は、その後の開発で墳丘や主体部を削平されている。同時期の集落の一部は、丘陵上に残るものの、高床倉庫群が存在した丘陵西側や川を挟んだ枝町遺跡付近に移動する。

この時期を境に吉野ヶ里遺跡では古墳時代後期（6世紀）になるまで遺跡の活動は認められない。

(3) 考古学から見た北内郭・南内郭の性格

溝で囲まれた区画を持つ集落を環濠集落と呼ぶが、佐賀平野や筑後川流域を中心に、溝の一部を方形または半円形に張り出す突出部を持つ区画を持つ集落が16ヶ所知られている。その代表的な遺跡として吉野ヶ里遺跡の北内郭・南内郭がある。

北内郭は、墳丘墓南約 100mに位置する。この北内郭が存在する地区は、弥生時代中期初頭から継続的に集落が営まれているが、環濠などの目立った施設はない。後期後半に入り、突出部を伴う溝の一部が確認されるが、後世の削平が著しく全体像が明らかでない。終末期になり、我々が復元集落で目にするのできる北内郭が成立する。北内郭は、二重の環濠により構成され、その平面形は、ちょうどアルファベットの「A」字形をしている。北内郭を A の向きで説明すると両側辺の中央を半円形に張り出し、下部にあたる基部の両側を方形に張り出す。

この北内郭に伴う建物には、掘立柱建物跡 7 棟、竪穴建物跡 3 棟が存在したとみられる。掘立柱建物跡のうち、祭殿とみられる 3×3 間の総柱建物跡は、柱の太さが 50cm にもなる柱を用いて建てられている。建物の一辺がそれぞれ 12.3m、12.7m と弥生時代の掘立柱建物跡としても極めて大型のものである。他の掘立柱建物跡には、南内郭同様、濠の張り出し部分に物見櫓として用いられるものがある。

この北内郭は、南西方向に出入口 1 か所を持つ。外濠と内濠の一部を掘り残し、陸橋部をつくる。その陸橋部はまっすぐ侵入できないように互い違いに作られる。この出入口の構造は、「虎口」と呼ばれる戦国時代の城館の出入口に似ている。

北内郭は、南内郭よりも面積は狭いものの、その平面形は左右対称な形に作られている。また、内郭の中軸線は、夏至の日の出方向および冬至の日の入り方向と一致することも考え合わせると極めて祭祀性の高い空間とみられる。この祭祀性の強さは、中広銅戈が埋納されていることや北内郭内の大型掘立柱建物跡が墳丘墓と南の祭壇を結ぶ軸線上に存在することからも窺える。

南内郭は、後期前半段階で竪穴建物を主体とする遺構が確認されているが、その時には環濠は認められない。南内郭が成立するのは、弥生時代後期後半段階である。このときに成立した南内郭の平面形は、ややいびつな形をした長方形をしており、南北約 150m、東西約 70m の規模で、環濠の一部を張り出し、物見やぐらを設ける。南内郭の南側にある平面形がアルファベットの「C」の形と弧状の濠からなる通称「構えの濠」が同時期に成立している。この南内郭の環濠は、いったん埋没したのち終末期に位置をずらし再度掘削される。現在復元されている南内郭は、終末期段階の南内郭を復元したものである。

この南内郭の特徴として、物見櫓の存在があげられる。この物見櫓は 1×2 間の掘立柱建物跡であり、濠の一部を方形または半円形に張り出した地点に建てられる。古段階の南内郭に 1 基、新段階の南内郭に 4 基の物見櫓が確認されている。

吉ヶ里遺跡の調査を担当した七田忠昭氏によると吉野ヶ里遺跡の北内郭・南内郭における突出部の存在は、古代中国の城郭の影響を受けて成立したとみている。北内郭・南内郭における方形及び半円形の突出部は中国の城郭に設けられた馬面（ばめん）や甕城（おうじょう）と呼ばれる施設を模したものと推定している。

七田は佐賀平野に突出部を設ける環濠集落出現の契機を後漢との交流（AD107）の結果、集落構造を中国の城館に近づけたものと推定し、その傍証として吉野ヶ里遺を中心とした

佐賀平野の弥生時代後期首長墓に副葬される舶載鏡や素環頭大刀の存在から佐賀平野の首長層が中国大陸との交渉を担ったとみている。

この七田の説は佐賀平野の弥生時代後期の首長層が大陸側と直接交渉を持ち、中国の文物のみならず、築城に関する思想なども導入したとする魅力的な仮説だが、現段階では、この考えをとる研究者は少ない。また、北内郭・南内郭内部の個々の建物の性格や出現時期を明らかにする上では、課題点も存在する。ただ、佐賀平野側の首長が中国大陸と交渉していたとすれば、吉野ヶ里遺跡で古代中国の暦法を入手していてもおかしくはない。

4 考古天文学への課題と期待

・これまでの考古学の研究のなかで天文を意識した研究は限られる。(天文に関する研究はどちらかというと思想的なものが多い。)

・方位や方向(たとえば頭位方向や甕棺の挿入方向)に関する研究はあるが、太陽や月との関係を考察する研究は2,000年代以降か。

・北條芳隆氏が提唱された「平原農事暦」の存在をうかがわせる他の遺跡の事例があるかどうか。

・古代中国暦法の日本列島への導入時期は、いつ頃か。その契機は。

・月の周期に合わせて遺跡や遺構が形成された場合、その作られた時期がより詳細に判明することになり、より具体的な年代論に迫れる可能性が高い。